「今も飢えで苦しみ、自由を求め、自らの国から逃れようとする人がいる。」「この事実を伝えて欲しい。」

私は、2 年前、韓国と北朝鮮の間にある非武装地帯で、北朝鮮から 3 度の脱出に失敗し、手と顔に強制収容所での拷問の傷跡が残る女性に会った。

私が住んでいたソウルから 50 キロも離れていない場所に、今も飢えで苦しみ、自由を求め国境を越えようとする人がいることを知り衝撃を受けた。このような世界が私のすぐ傍に存在することすら想像もしなかったからだ。

韓国でも日本でもメディアで報じられる北朝鮮と言えば、核開発やミサイル発射ばかりで、北朝鮮住民の苦しんでいる姿から目を背けるかのように彼らの生活は報じられることはない。多くの人は北朝鮮での飢餓は昔の話だと勘違いするほどである。

しかし、現実は、今もまだ、そこに存在しているのである。私自身、彼女の話を聞くまでは、北朝鮮の実情を知らず、また自ら進んで調べようともしなかった。正直、調べようという「きっかけ」すら私にはなかった。

その後、私は、彼女との約束を守るため、友人に私が聞いた話、考えたことを話すようになったが、皆の反応は、怖そうな話だねと言うだけで、関心を示そうともしなかった。

私たちと同年代の人が、すぐ傍で、苦しんでいるというのに。

私たちは、運よく日本に生まれ、何不自由なく生活している。北朝鮮の私と同年代の子も、もしかしたら、私と一緒に日本で生まれ、暮らすチャンスがあったかもしれない。運命は仕方ないが、それを変えることは可能だと考えている。

地球上には、様々な場所で、様々な形で苦しんでいる人、助けを求める人がいる。将来、私は、その実情を伝えるためメディアで仕事がしたい。私が、脱北女性から「きっかけ」を貰ったように、「きっかけ」を与える人間に私はなりたい。

しかし、今のメディアは、聴衆が聞きたい、読みたいことのみを意識した報道ばかりで、時間の経過と共に、大事なことでさえも報じられなくなり、皆の記憶から消えてしまうこともある。

まさに、北朝鮮の飢餓問題、拉致問題などは、ここ数年でメディア露出が極端に減った例と言える。

私は、本当に必要な情報とは何かを考えた上で、それを公平に、継続的に国民に伝えていきたいと考えている。

そして、あの脱北女性と再会した際には、自信を持って「あの時の約束を私は、しっかり守ったよ」と言えることが出来る人間になりたい。